

令和 3 年 3 月 3 1 日

資料提供

担当課室	農業環境・鳥獣害 対策室	農作物病虫害防 除所
担当者	大谷	岡本
電 話	073-441-2905	0736-64-2300

## 病虫害発生予報 第 1 号（4 月予報）について

令和 3 年度病虫害発生予報 第 1 号（4 月予報）を別添のとおり発表します。

# 病害虫発生予報 第1号（4月予報）

和歌山県農作物病害虫防除所

## < 予報の概要 >

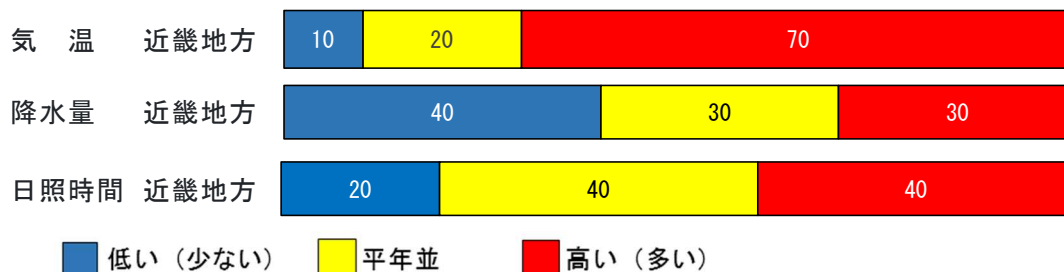
作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	ヒメトビウンカ	少	野菜全般	灰色かび病	並
	ツマグロヨコバイ	やや多		アザミウマ類	やや少
タマネギ	白色疫病	やや少	カンキツ	かいよう病	並
	べと病	多		そうか病	やや多
エンドウ	褐紋病	少		ミカンハダニ	やや多
	うどんこ病	並	カキ	うどんこ病	並
キャベツ	コナガ	並	ウメ	かいよう病	やや少
キュウリ	べと病	やや多	果樹全般	カメムシ類	やや少
	褐斑病	少			

## 気象予報

近畿地方 1か月予報（03/20～04/19）

2021年03月18日14時30分 大阪管区气象台 発表		
特に注意を要する事項		期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。
向こう1か月 03/20～04/19	天候	天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率70%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。
1週目 03/20～03/26	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目 03/27～04/02	気温	2週目は、高い確率70%です。
3～4週目 04/03～04/16	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

### 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）



# I. 水 稲

## 1. ヒメトビウンカ

- (1) 予報内容 発生時期 やや早  
発生量 少

### (2) 予報の根拠

- ① 3月中旬の休閑田の捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市3.7頭、成虫率92%（平成12.4頭、成虫率50%）、紀の川市0頭（平成7.6頭、成虫率42%）、かつらぎ町0頭（平成6.0頭、成虫率38%）であった。

### (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカはイネ縞葉枯ウイルスを媒介する。イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、休閑田や雑草地付近での育苗を避ける。  
② は種時（覆土前）～移植当日に育苗箱施薬剤を施用する。  
③ 田植え前から作期を通して、ヒメトビウンカの生息場所となる水田周辺雑草の除草管理を徹底する。

## 2. ツマグロヨコバイ

- (1) 予報内容 発生時期 やや早  
発生量 やや多

### (2) 予報の根拠

- ① 3月中旬の休閑田の捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市8.7頭、成虫率92%（平成4.1頭、成虫率52%）、紀の川市0頭（平成0.2頭、成虫率17%）、かつらぎ町38.5頭、成虫率72%（平成22.0頭、成虫率44%）であった。

### (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① は種時（覆土前）～移植当日に育苗箱施薬剤を施用する。

※ 水稻害虫の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の水稲害虫の予察灯誘殺消長も参考にする。

# II. 野 菜

## <タマネギ>

### 1. 白色疫病

- (1) 予報内容 発生量 やや少

#### (2) 予報の根拠

- ① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は17%（平成25%）、発病株率は0.2%（平成2.7%）であった。

- ② 4月の気象予報による

#### (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 同一のほ場内でも発病に偏りがみられることがあるので、ほ場全体を見回り発病が集中しているところは特に丁寧に薬剤散布を行う。  
② 排水を良好にし、降雨による浸冠水や停滞水をなくす。

### 2. ベと病

- (1) 予報内容 発生量 多

#### (2) 予報の根拠

- ① 県北部での3月中旬の越年罹病株の発生ほ場率は10%（平成6%）、発病株率は0.12%（平成0.04%）であった。二次感染株の発生ほ場率は10%（平成7%）、発病株率は0.3%（平成0.1%）であった。

- ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 前年の発生が多かったほ場では、本年も発生しやすいので注意する。
  - ② ほ場をこまめに見回り、越年罹病株の早期発見と抜き取りを徹底する。二次感染株の発病葉についても、出来るだけ除去する。抜き取った株や除去した葉は袋に入れ、ほ場外に持ち出して適切に処分し、早急に薬剤散布を行う。
  - ③ 胞子飛散による感染拡大を防ぐため、発生が認められないほ場においても早期からの予防散布を徹底する。
  - ④ 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長させるので、他系統の薬剤とのローテーション散布を行う。
  - ⑤ 排水を良好にし、降雨による浸冠水や停滞水をなくす。
  - ⑥ 令和2年度病害虫発生予察注意報第3号（令和3年3月8日発表）を参照する。

## <エンドウ>

### 1. 褐紋病

- (1) 予報内容 発生量 少
- (2) 予報の根拠
  - ① 県中部の露地栽培における3月中旬の発生ほ場率は0%（過去9年の平均31%）であった。
  - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 雨が多いと多発するので薬剤散布は早めに行う。
  - ② 多湿条件で発病が助長されるので、排水対策や通風対策に努める。

### 2. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 県中部の露地栽培での3月中旬の発生ほ場率は0%（平年2%）であった。
  - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① 発生初期から薬剤防除を行う。

## <キャベツ>

### 1. コナガ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
  - ① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率3%、1株当たり発生密度0.0頭）であった。
  - ② フェロモントラップによる3月1～20日の誘殺数は、紀の川市3頭（平年5.1頭）、和歌山市46頭（過去9年の平均17.6頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
  - ① ジアミド系、IGR剤などの薬剤は殺虫効果の低下が認められている。
  - ② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤は連用しない。

## <キュウリ>

### 1. ベと病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県中部での3月中旬の発生ほ場率は70%（過去8年の平均24%）、発病葉率は16.1%（過去8年の平均4.2%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。

② 病原菌は気孔から侵入するので、薬液は葉の表裏にムラなくかかるように散布する。

③ 肥効が低下したり草勢が衰えたりすると発病が助長されるので、適切な肥培管理に努める。

④ 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長させるので、他系統の薬剤とのローテーション散布を行う。

## 2. 褐斑病

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

① 県中部での3月中旬の発生ほ場率は10%（過去7年の平均41%）、発病葉率は0.2%（過去7年の平均6.9%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。

② 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長させるので、他系統の薬剤とのローテーション散布を行う。

③ ボスカリド剤、チオファネートメチル剤、アゾキシストロビン剤に対する感受性低下菌が認められている。

## <野菜全般>

### 1. 灰色かび病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の施設栽培キュウリでの3月中旬の発生ほ場率は0%（平年2%）であった。

② 県中部の施設栽培ミニトマトでの3月中旬の発生ほ場率は0%（過去5年の平均6%）であった。

③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設の湿度低下を図り、過灌水や滞水しないように注意する。

② 発病部位を除去し、発病初期から薬剤防除を行う。

③ 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長させるので、他系統の薬剤とのローテーション散布を行う。

### 2. アザミウマ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培イチゴでの3月下旬の発生ほ場率は、ヒラズハナアザミウマ0%（過去5年の平均12%）、ミカンキイロアザミウマ0%（平年0%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリでの3月中旬の発生ほ場率は、ミナミキイロアザミウマ0%（過去7年の平均18%）、ミカンキイロアザミウマ0%（過去7年の平均3%）であった。



(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年10月中旬の「富有」の発生ほ場率は82%（平成78%）、発病葉率は18.0%（平成19.8%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 子のう胞子飛散最盛期は4月下旬～5月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。前年多発したほ場では、この時期の防除を徹底する。

② 4～5月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。

③ 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、薬液は葉裏をねらって丁寧に散布する。

## <ウ メ>

### 1. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 3月上旬の予察ほ場（無防除、みなべ町東本庄）での2年生枝の潜伏越冬病斑形成枝率は0%（過去4年の平均1.7%）であった。

② 県南部（みなべ町、田辺市）の前年6月上旬の発生ほ場率は12%（平成54%）、発病果率は0.5%（平成2.4%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 強風雨により感染が助長されるため、常発ほ場では防風施設の整備等の防風対策を励行する。

② 生育期の薬剤防除は、発芽期からほぼ10日おきに数回、抗生物質剤を散布する。強風雨直前の散布で、より高い効果が得られる。

## <果樹全般>

### 1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県内47地点のチャバネアオカメムシ越冬成虫の捕獲頭数は落葉50リットル当たり0.1頭（前年0.2頭、平成0.6頭）、捕獲地点率は8.5%（前年13.0%、平成22.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 果樹カメムシ類の飛来量はほ場間差が大きいので、ほ場内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。

② ウメ、モモなどでは、収穫前に越冬成虫の飛来が確認された場合は速やかに薬剤による防除を実施する。

③ ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。

④ カンキツでは蕾、花が加害されるので、被害が認められた場合は薬剤による防除を行う。

⑤ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病害虫防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所>

[https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/  
boujyosyo-yosatsujoyouhou.html](https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujoyouhou.html)

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780